

キャリアヒストリー：わたしの場合 No. 3 〈卒後 30 年余。育児との両立も乗り越え、医学教育学主任教授として学内外医学教育に取り組み中〉

I わたしの医学教育者としての特徴を、端的に表現すると？

- * 医学部入学までの「諦め」や「負い目」をバネに、学位取得、留学、研究・教育、育児との両立に、精力的に取り組んできた医学教育者。
- * マイクロ・ティーチング経験や成人学習理論との出会いを契機に、幼少からの教師への憧れを、医学教育の文脈で実践的に追求してきた。

II わたしが、医学教育者として（／になるために）歩んできたキャリアとライフを、一言で言うと…

- * 生育環境の中で抱いた教師への憧れを家庭の事情で諦め、推薦入学で医学部に入った。
- * 大学院生・臨床医、臨床系教員、医学教育学講座教員のキャリアパスを、育児との両立という課題を抱えつつ、精力的に歩んできた。
- * 教育実践経験や海外視察、留学などで医学教育への関心と医学教育者としての自覚を深め、学生指導を軸に、医学教育に積極的に取り組んできた。

キャリアの時期区分と経験や活動

- ①（大学入学前）期 … 家族・親戚に医師と教師の多い家庭で育ち、教員養成大学の環境の中で、自然と教職につくことを考えるようになった。高校3年年初めまで文系、家庭の事情で医学部への進学を考えるようになり、推薦入学を利用した。
- ②（医学部学生）期 … 一般入試を経た同級生との学力差に驚き、自分の小学校～高校の環境が特殊だったと実感する。医学部の勉強を進めると、小さいころから不思議に感じていた謎が次々に解き明かされるようで楽しかったが、学力試験を受けずに医学部に入学した負い目を常に感じた。
- ③（大学院生、臨床医）期 … 1991年にA大学医学部を卒業後、同大学大学院内科学系課程に入学し初めの2年間は現在の臨床研修医のように働きながら夜間や週末に実験をし、3年目からはベッドフリーとなり研究に専念した。1995年学位取得し、大学病院で働きながら研究も続け、米国と英国に留学をした。
- ④（臨床系教員）期 … 2004年A大学内科のスタッフとして正式に学生教育に携われるようになった。医学教育学講座のマイクロ・ティーチング*への参加により、自らの授業を振り返る。2006年に、文科省の大学教育改革のための特色GPによる海外のアウトカム基盤型教育視察に応募し、オランダのM大学とG大学を視察した。成人学習理論との出会いから、医学部の勉強が苦でなかったのは、幼少期からの単純な興味を基盤とし、将来の社会的役割に向けて必要な学びであると認識できたためであり、そのような自己主導型の学習により入学時の学力不足が補い得たであろうことを省察した。そのことが、自己肯定に繋がった。
- ⑤（医学教育学の教員）期 … 医学教育に興味を持ち、2007年A大学医学教育学兼任准講師、2008年同専任講師となった。その後も欧州医学教育学会（AMEE）への参加・発表、米国H大学のプログラム参加を重ね、2016年にA大学医学教育学主任教授となった。2018年医学教育専門家資格取得。2021年B大学に転職し、学生教育の実践、カリキュラム開発、教育開発研究、学内外の医学教育の業務を務めている。

Ⅲ 医学教育者としての、これまでのキャリアとライフの歩み

時期区分	ライフイベント等	特に取り組んだこと (課題・重点等)	達成・実現できたこと (業績・効果等)	困難さや苦勞したこと (問題・悩み等)	原動力や助けられたこと (動機・契機・環境等)
①大学入学前期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医師・教師の多い家庭環境 ・ 小中高は、教員養成系大学附属学校に在学。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の teaching assistant 的役割を享受。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文系から、家庭の事情で医学部進学へと進路変更。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物やヒトの身体に興味。 ・ 教員養成系大学の環境や教育実習等への憧れにより教職を希望。
②医学部学生期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 推薦入試により医学部入学。 ・ 1991年にA医学部卒業。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 座学見学型授業・実習。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 一般入試の同級生との学力差や教育環境の違いを実感。 ・ 推薦入学に常に負い目。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生物の謎を解き明かす楽しさ ・ 試験対策の作成資料が、同級生・下級生に好評。
③大学院生、臨床医期	<ul style="list-style-type: none"> ・ A大学院内科学系課程に入学。 ・ 米国留学。 ・ 結婚。 ・ 英国留学、留学中に出産。 ・ 育児。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年間は臨床、夜間や週末に実験、3年目研究専念 ・ 大学病院のベッドサイドでの学生・研修医の指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1995年に博士学位取得 ・ 専門領域での専門医や指導医の取得。 ・ 学会発表。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事と育児の両立。 ・ 早朝から深夜まで保育園に子どもを預け、てんてこ舞いの日々。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 専門領域での論文の発表、研究費の獲得、臨床では特に女性患者からの感謝の言葉。 ・ 保育所アルバイトの医学生からの質問や相談。
④臨床系教員期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2004年A大学内科スタッフ就任。 ・ 2007年同大医学教育学兼任准講師。⇓ ・ 2008年同専任講師。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2006年、アウトカム基盤型教育の海外視察**でオランダM大学・G大学訪問。(アウトカム基盤型カリキュラム、アクティブ・ラーニング手法、評価方法) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 論文発表。 ・ 学会発表 ・ 成人学習理論と出会う。 ・ 入学時の学力不足を補う自己主導型の学習ができていたのかもしれないと省察。⇒自己肯定 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育の講義や実習を受けた経験や教員免許がなく、講義方法や試験問題の作成方法がわからず、戸惑いや負い目。 ・ 仕事と育児の両立。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ マイクロ・ティーチング*で自らの授業の客観視が可能に。 ・ 熱心な先輩や学生の声を参考に、見様見真似で講義準備。 ・ 医学教育制度に興味。高等教育の意味や自分の役割を認識。
⑤医学教育の教員期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2016年医学教育学主任教授。 ・ 2021年B大学に転職。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ A大学に加え、B大学でも医学教育分野別評価、JACME等の受審。 ・ B大学にて、学生教育、カリキュラム開発、教育開発研究、学内外医学教育。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 欧州医学教育学会(AMEE)への参加・発表、米国H大学プログラムに参加。 ・ 2018年、医学教育専門家資格を取得。 ・ A大学の新校舎をデザイン。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ どっぷり医学教育の世界へ。 ・ 医学教育モデル・コア・カリキュラム、共用試験、JACME等、国内の医学教育の変化に携われているとの実感。 ・ 研究室配属希望学生、講座への入職希望者の存在が大きな励み。

*マイクロ・ティーチング…教員が少人数の前で模擬授業を行うイベント **アウトカム基盤型教育の視察…大学教育改革のための特色GP

IV. 抱負

人口動態、医療需要が変化し、大学教育や大学病院のあり方も問われています。今後も医学・医療者教育は変化せざるを得ないと思われます。全体像を睨みつつ、教育現場では患者、学生、教職員の多様化に対応するしかありません。今後も医学教育の流れを感じながら、教育の改革を現場で行っていきたいです。先人達の教えや自らの経験をもとに、特に若手や子育て世代を応援しながら、新しい時代の医学・医療者教育の実践と研究活動を続けていきたいと思ひます。

V. 次世代や悩めるあなたへのメッセージ

医学・医療者教育に興味を持ち、専門にしようかどうしようか迷っている方は、医学教育学会大会でどのようなテーマが扱われているか、どのようなディスカッションになっているかを知って下さい。御自分が興味のある領域が既にテーマとなっているか、テーマとなっていない場合にはどうしてテーマになっていないのか、大会に参加して議論して下さい。興味のある人にとっては、教育の実践や研究ができる環境にいられることは有り難いことです。また、日本医学教育学会は次世代の育成のために、委員会レベルで色々な支援をしています。是非多くの学会員と繋がり、交流して下さい。

また、何かを依頼されるということは有り難いことです。今の働き方には合わないかもしれませんが、私はなるべく受けるようにしてきました。医学教育に関する機会が提示されたら、依頼を受けたら、飛び込んで経験してみることも医学教育専門家への道に繋がると思ひます。

私のキャリアヒストリーも何らかの参考になれば嬉しいです。